

第2回白馬村図書館等複合施設検討委員会 議事要旨

日時：令和4年5月24日(木) 16:15~18:15

場所：白馬村保健福祉ふれあいセンター 学習室

区分	氏名	所属等	出欠
委員	平賀 研也	前県立長野図書館長	○
	富山 正明	社会教育委員長・図書館協議会委員長	○
	前堀 美緒	しろうま保育園保護者会長	○
	山本 拓真	白馬北小学校 PTA 会長	○
	吉沢 一夫	白馬南小学校長	—
	岩井 良三	白馬村民生児童委員協議会 主任児童委員	○
	藤川 公代	白馬村社会福祉協議会	○
	ワード エミリー	Hakuba International Business Association	○
	中尾 美琴	白馬中学校生徒	○
	田中 悠李	白馬中学校生徒	○
	宮澤 一生	白馬高等学校の生徒	○
	石崎 椋太	白馬高等学校の生徒	○
	北澤 麻希	公募委員	○
	福島 のり子	公募委員	○
	川坂 保宏	公募委員	○
	山口 聡一郎	公募委員	○
事務局	松澤 宏和	生涯学習スポーツ課長	○
	渡邊 宏太	生涯学習スポーツ課 生涯学習係長	○
	大坪 裕子	図書館司書	○
	下川 浩毅	子育て支援課長	○
	松澤 拓哉	子育て支援課 子育て支援係長	○

報道機関：2社（大系タイムス、ユーテレ白馬）

傍聴：なし

1. 開会

松澤生涯学習スポーツ課長が開会を宣言した。

2. 挨拶

(富山委員長)

前は「交流」というテーマで対話をしたが、コロナ禍で奪われた「人と会って話す機会」も徐々に回復しつつある。複合施設において、交流をどう実現していくか。また、居場所としてのあり方も考えていきたい。

本日は、初めに官民連携に関して事務局からの説明を聞いた上で、委員それぞれの素直な思いを基に対話をしていきたい。

3. 委員自己紹介（第1回検討委員会欠席委員）

(福島委員)

白馬で生まれ育ち、小学生と保育園児の保護者として暮らしている。公募委員として、白馬の未来につながる複合施設に貢献できればと思う。

(エミリー委員)

Hakuba International Business Association (HIBA) のメンバーとして声をかけていただいた。白馬村に住む外国人の意見や視点を伝えていきたい。

(川坂委員)

新しい図書館が建設されると聞いてとても喜んだが、候補地について村民の意見を汲み取ってもらえなかったように感じた。見直してもらえるということで、住民と行政でキャッチボールしながら良い施設にしていきたい。

(藤川委員)

白馬村社会福祉協議会の職員として、高齢者・障がい者・子どもなど幅広い世代と関わっている。そういった方々の視点も考慮して、多くの人が利用しやすい施設となるよう意見していきたい。

4. 官民連携について

資料に基づき説明を行なった。

官民連携 (PPP) は、官＝行政 (Public) と民＝事業者 (Private) の協力 (Partnership)

のことで、地方公共団体は厳しい財政状況の中、人口減少や少子高齢化、公共施設の老朽化など多くの課題を抱えている。

公共施設の新築や維持管理について、行政だけで担うのではなく、民間企業や団体のノウハウや創意工夫を活かして事業を進めるという制度が2000年頃から広がりつつある。公共施設だけでなく、道路や水道など対象は様々であり、手法についても多様な形式がある。

白馬村では、平成29年に「PPP/PFI*手法導入優先的検討規定」を定め、事業費総額が10億円以上となる公共施設整備を行う際には、官民連携手法を優先的に検討することになっている。今回の案件においても、最終的にどうなるかはさておき、規定に含まれるものであるため、検討を行う必要がある。

*PFI：Private Finance Initiative

公共施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用して行う手法。国や地方公共団体等が直接実施するよりも効率的かつ効果的に公共サービスを提供できる事業について、PFI手法を導入することで、国や地方公共団体の事業コストの削減、より質の高い公共サービスの提供が期待される。

官民連携の事例として、須坂市では学校給食センターでPFIを導入している。設計や建築・運営など関係する企業等で構成される特定目的会社を設立して、施設整備と15年間の運営・維持管理に必要となる経費約50億円を均等払いで市が支出している。

図書館では、三重県桑名市で初めてPFIが導入された。運営期間は30年で、複合施設に含まれる保健センターなどの機能は市が直営している。

愛知県安城市では、図書館を含む複合施設にPFIが導入されているが、図書館は市の直営としている。

山形市では子育て支援施設（子どもの遊び場）がPFIで整備・運営されている。

施設整備や運営・維持管理のあり方は多様であり、決まった形式はない。構成企業により特定目的会社を設けて事業を担うPFI手法だけでなく、NPO法人など住民団体が図書館の運営を担っている事例も、官民連携（PPP）の一例である。指定管理者制度で図書館を民間事業者が運営することで、サービス向上や居心地の良さ、賑わいなどを創出している事例もあるが、公共の運営に戻す事例などもある。事前の決め事により民間事業者の運営に住民がしっかり参画できるような仕組みを確保している事例もある。

全国の図書館約3,300館のうち、約20%にあたる約650館が指定管理者制度により民間運営となっている。

白馬村図書館等複合施設においては、基本構想・基本計画の策定時に十分な専門的調査を実施しておらず、2021年1月に国交省の合同サウンディングに参加して様々な業種の民間事業者と意見交換をしたところ、案件に興味を持つ事業者が複数存在していることを確認

した。

優先的検討を具体的に実施するため、調査費の全額が国の補助対象となる国土交通省の先導的官民連携支援事業に応募し、採択されたため、今年度において専門的調査を実施する予定である。

地域の住民や事業者の官民連携に対する理解を深めた上で、意見交換の機会を設けたり、興味のある事業者や団体と対話したりすることで、実現可能性などを探っていきたい。また、居場所や交流拠点としての価値を高める機能についての検討や、財源なども含めて総合的にどのような形で官民連携が実現し得るのかといったことを調査したい。

検討委員会の検討と並行して進め、それぞれの状況を共有しながら、今年度末に基本計画を見直したい。

5. 居場所・交流に関する対話

(平賀副委員長)

長野県内では新しい図書館施設の計画が一段落している状況であるが、白馬村が住民と対話をしながら検討していることは、図書館関係者が注目している。引き続き実りある議論をしたい。

初めに前回の会議の振り返りをするが、この検討委員会においてみんなで何かを選んだり決めたりする場ではない。基本計画を見直すにあたり、改めて検討すべき事項がいくつかあり、これまで議論してきたこともあるが、地域で暮らしている中高生からお年寄りまで、子育て中の人や様々な産業に従事されている方など、いろんな人の意見に集まってもらい、対話の中から意思決定のための方向性を見出していきたい。素直な意見を出していただき、事務局の皆さんに聞いてもらう機会にしたい。

基本計画の見直しにあたり、大きく分けると候補地、機能、事業方式(整備・運営の手法)の3点を考える必要がある。用地については、それぞれの思いや考えがあるため、具体的に「どこがいいか」と話すのではなく、「どんな環境で居心地良く過ごしたいか、交流したいか」ということを、自分の暮らしをベースに、公共の開かれた空間がどのような場所にあることが望ましいかという話をしたい。

事業方式については、行政よりも民間が建てた方が安くて良い施設になるということもあり、民間で資金調達をして建てたものを行政が借りる事例など、多様なあり方が存在する。仮に民間事業者が運営したとしても「公共施設=みんなの施設」であることに変わりはない。これまでは、税金で便利なもの・楽しいもの・居心地が良いものを行政に用意してもらい、住民は客として利用するという関係性であったが、これからは住民が当事者として「自分たちの場所としてどう関わるか」ということが大切になってくる。「どの企業がどんなサービスを提供してくれるか」という視点ではなく、「村のみんなのためにその施設で自

分も何かできるかもしれない」、「自分も運営に関わり続けることができるかもしれない」という意識で考えてほしい。委員の皆さんは既に関わり始めていて、施設が完成して運営していく中でも、自分がやりたいと思ったことを誰かと一緒にやってみることで、白馬村がさらに住み心地の良い場所になるのではないか。そういった議論をした上で、それに相応しい施設の運営のあり方を事務局の皆さんに考えて判断してもらおうというのが、検討委員会の目的だと思っている。

前回は、「機能」を考える上で「自分が体験したいことや暮らしのあり方」について対話した。白馬村の基本理念に則して、「交流拠点」とすることが施設の基本的な方針ではあるが、皆さんが体験したい情景はどんな様子か、どんな場所ならそれが起こり得るか、それにより何が変わりどんなことが期待されるか、ということを考えて共有してもらった。

皆さんの想いを要約すると、一つは「仲間と過ごす居場所が欲しい」というもので、高校生が放課後に行く場所や、高齢者が日中に過ごす場所などが求められている。もう一つは、「知らない人と出会いたい」というもので、外国語を学んでみたいという高校生の声もあり、外国から来られた方はたくさんいるのに、なかなか出会えないという状況もある。体験としては、図書館を核とした複合施設であったとしても、本を読むだけでなく、ものをつくったり、話したり、見たり、聞いたり、食べたり、触ったりといった五感を使った体験をしたいという声もあった。みんなと知恵や想いを共有することで、楽しい時間を過ごしたり、自分の成長に繋がったり、暮らしの安心感が高まったり、地域の未来が少し良くなることも期待される。

それがどんな場所や空間で実現されるかということを見てみると、一つは「コミュニケーションが生まれる場所」で、図書館だから静かにしなくてはいけないというよりは、たくさんさんの会話が生まれる空間を望む声が目立っていました。もう一つは、例えば「地域の課題を解決しよう！」というような意識が高い人ばかりが集まるのではなく、目的がなくても心地よく過ごせるような空間を大切にしたいという声も多かった。また、「自然環境に囲まれている空間」を望む声がとても多かったのは、白馬村の特徴だと思われる。

今回は、前回欠席して初参加の委員もいるため、機能・体験したいことに関する話をもう少し深く話したい。

自分の周りを考えたときに、どんな人たちが居場所や機会を求めているのか。五感を使った学びや創造とはどういうものなのか、どんな人がどんな体験をしたいのかということを探ってほしい。空間のあり方として、例えば「食べる」を通じてコミュニケーションしながら、地域の伝統的な暮らしや文化の違いを知ることにもできる。そのためにはどんな空間が必要になるか、ということ改めて考えてほしい。

各委員が4つのグループに分かれて、居場所や体験について対話し、グループごとに内容

を発表した。

- ・居場所がないのはどんな人たちだろうと話したところ、放課後の児童・生徒や、集まって話したりものづくりをしたい子育て世代などが挙げられ、いろんなことに使える多目的なスペースがあって、小学生がボードゲームなどで遊んだり、その傍らでは料理教室が開かれていたり、高齢者が雑談していたり、高校生が勉強していたり、そういった空間ができると横のつながりや交流が生まれるし、特定の目的を持っていなくても訪れやすいのではないかと。児童・生徒は放課後や休日に気兼ねなく集まって安心して楽しく過ごしたり、子育て世代にとっては集まって雑談をしたりものづくりをしたり、高齢者は福祉的なサービスを受けられたり、発表の場とすることで生きがいにつながったり、そういった場を設けることで各世代のニーズを満たすことができる。「図書館らしくない図書館をつくろう」という話になった。
- ・子育て支援ルームの敷地は、木流公園と隣接して自然もあり、らくだ山の辺りからは山もきれいに見える。前回は「アウトドア」という話が出たが、屋内と屋外が連動している場所として良いのではないかと。12月の視察ツアーで訪れた池田町や松川村はホールと併設されていた。ウイング21もホールや体育館のある立派な施設であり、中学生の部活動や高齢者の卓球クラブなどにも活用され、既に人が集まっている場所であるため、増築等で図書館等の機能を集約するのも一つの案だと思う。
- ・居場所がない人はどのような人かと考えてみると、人付き合いが苦手な人や、両親が共働きで下校して一人で過ごしている子ども、独居高齢者など孤立している人が思い当たるが、そういった人たちも居場所として過ごせれば良い。白馬村は広いので、みんなが来やすいようなアクセスについても考えなくてはならない。
- ・村民だけでなく長期滞在される方など観光で来ていただいた方にも利用してもらいたい。特に雨天の日にはやることがないため、天気が悪い時に居場所として使ってもらえるような機能もあれば良い。
- ・ビジネス関係で人が繋がる場所や、気軽に趣味を楽しめるような場所、雑談などを含めて悩みを相談しやすい場所、目的なく居られる・過ごせる場所がない。
- ・観光客だけでなく村民も雨の日にはやることがない人が多い。
- ・小中学生の放課後の居場所や、不登校の子どもが平日の日中に居られる場所があると良い。
- ・雨天時に子どもが遊ぶ場所がないため、室内に遊具などがあれば体を使って遊ぶことができる。
- ・保護者の中でも、違う学年の保護者との交流の機会が少ない。過去には実施していたこともあった、服や用具などの交換会を図書館で定期的に行うことで、交流も生まれるのではないかと。
- ・屋外の遊具については、支援ルームは小さい子どもたちを対象にしたもので、グリーン

スポーツは対象年齢が高めであるため、その間の年代が遊べるような遊具や世代を超えて遊べるような空間があったらいい。

- ・音楽を楽しめるようなスタジオがほしい。部活動は学校内の活動に限定されてしまうが、吹奏楽や軽音楽を通じた中高生と大人の交流もできる。
- ・白馬村には様々な国から来た方が暮らしているので、料理を一緒に作ったり食べたりするイベントがあれば交流する機会となって良い。

(平賀副委員長)

これまでの公共施設は、調理室、体育館、プール、会議室、図書館といったように機能を箱として作る、それを集めるということが多かったと思うが、今日の皆さんの話を聞くと、本当の意味での「多目的」という印象を受けた。子育て中の人たちが話をするのも、高校生が話をするのも、ある意味同じことであり、それが起こりやすい空間が欲しいとか、ゲームをして過ごしたり、無目的で過ごしたりしても良いが、それをするための部屋を個別に設ける必要はなく、そういった体験が起きる仕組みや仕掛けがあれば良いのではないかと。

体験からイメージを膨らませてみると、〇〇室、□□室といった個別の機能ではなく、多様な人がいろいろな目的で使えるような仕組みが埋め込まれたオープンな場所が望まれているのではないだろうか。

行政は、図書館機能、子育て支援機能、博物館機能など、「機能」を決めたがるが、皆さんのイメージは必ずしも「機能」にこだわるものではないと感じた。自由で緩やかで、何かが起こるきっかけが埋め込まれた空間をイメージした上で、機能を計画にどう記載していくか検討してほしい。

今回、候補地の話をしてもらったグループもあったが、子どもたちが自由に体を動かして遊べる公園や、高校生がスケートボードなどを体験できるような、特定の目的の専用の施設ではなく、いろいろな人によって様々な使われ方がされるような空間がほしいという意見も多くあったように感じる。次回以降、何をテーマに議論するのか、今日の結果を踏まえて考えたいが、委員の皆さんからも希望があれば提案してほしい。

(川坂委員)

候補地についてはどう考えているか。

(事務局)

基本計画策定時のA～Dのうち白馬駅を除いた3地点の中で、住民や議会でも要望の多かったC候補地(子育て支援ルーム)を中心に検討したいと考えている。

(平賀副委員長)

次回以降、これまでに話してきたことを基に、「この場所ならこういうことができそう」

という具体的な話や交通アクセスに関することなどを話すのも良いと考える。委員の皆さんに候補地に関する資料を改めて共有した上で、実際にその場所を訪れてイメージを膨らませながら話すといったことも検討したい。

先ほどウイング 21 の話題も出てきたが、自治体にとって公共施設の管理や統廃合・新設は大きな課題であるが、同じようなものが 2 つあるからと言って必ずしもどちらかを廃止しなければならないというわけではない。例えば既存の子育て支援施設があったとしても、今回新たに設けて、それぞれの役割を特化させていくことも一つのあり方。村内にホールや公民館的な施設があるが、そこの関係性なども一度議論していただきたい。

事業方式についても、市民が設立した NPO 法人が運営する施設もあり、公共や民間の運営と組み合わせられている事例もある。地域の人にとっては起業のチャンスでもあり、施設の中にチャレンジショップのようなものがあったり、カフェと子ども食堂が時間を分けて運営されているところもある。単純に外の企業が入るだけでは、数年で撤退してしまうということも少なくない。自分たちがどう関われるか。ものづくりの教室を開催するときにも、単なるお稽古事としてではなく、みんなのためになることをどんどん提供していく、それをサポートしてくれる人がいる。市民活動サポートセンターのようなものが増えているが、一人ひとりの市民が他の方のために、より効果的に活動するためのサポートをしている。自分自身のビジネスチャンスだったり、自分が他の方のビジネスの役に立てる機会でもあったりするため、どこかで市民参画の話もしていきたい。

6. 閉会

松澤生涯学習スポーツ課長が閉会を宣言した。